



# 玉田 敦子

TAMADA Atsuko

講師 人文学部共通教育科

【学位】博士(パリ第四(ソルボンヌ)大学)

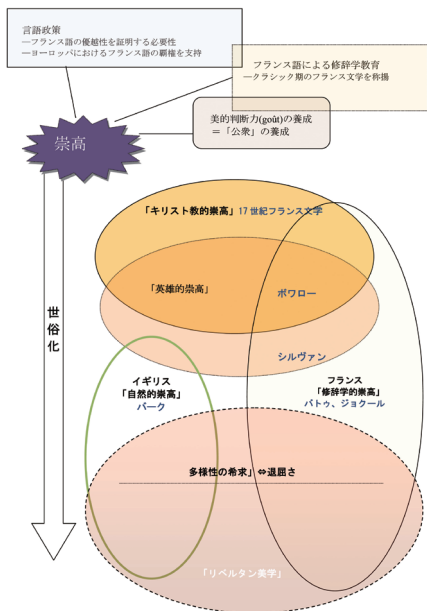
【学歴】一橋大学社会学部

慶應義塾大学文学研究科

専門分野 18世紀フランス文学・思想

研究テーマ 修辞学の世俗化と「崇高」の問題

### 修辞学の世俗化と「崇高」の問題



### 研究紹介

修辞学は、「いかに書くか?」という人間にとって本質的な問題を扱う学問である。18世紀フランスでは、修辞学教育が国民国家の成立においても重要な役割を果たしていた。前世紀までラテン語で行われていた修辞学教育がフランス語で行われた背景には、アカデミー・フランセーズ主導の言語政策があったためである。

「崇高」は、古代ギリシアにおいて修辞学が生まれて以来、修辞学の至高の価値とされていた。ボワローは1674年に、ロンギノスの『崇高論』(紀元1世紀頃)の翻訳を出版したが、その際、翻訳の序文に崇高の例として挙げた17世紀の作品は、アカデミーの言語政策において、フランス語が古代語に比肩することの重要な論拠となる。修辞学と「崇高」概念は、キリスト教権力が弱まるに従って世俗化し、18世紀美学における中心的命題となる。

「崇高」は、18世紀の英語圏においてパークの著作に描かれる「自然的崇高」として発展する一方、カントの『判断力批判』によって理論化されたが、現代においても、政治性の強い美学概念として広く注目を集めている。この、「崇高」の価値の変化を軸に、ヨーロッパ近代の思想的発展を読み解いていく。